

上杉 文代さん その1 (全3回)



うえずぎ ふみよ
1924年、和歌山生まれ。8男3女の長子。1943年、和歌山女子師範卒業、国民学校勤務。敗戦後結核のため休職をくりかえす。1954年に和歌山県立ろう学校就任。1985年退職。以後、地域の障害者問題に深くかわる。

編集部が迫る!



1967年、全国障害者問題研究会が日教組全国教研特殊教育分科会の第11回から16回までの「差別から解放へ」の柱のもとでの討議の積み上げの結果生まれた。(中略)「生活の事実の中に差別がある」を踏まえて障害者観、発達観、教育実践が討議されました。最後にそれらは近江学園で実践する仲間たちから提起された「発達保障」の理念に包含され、全障研は結成されます。

黄色い冊子

「おい、我らの研究会ができたぞ」
1967年、同僚の青年教師の明るい声が職員室に響いた。朝礼前に机の上に黄色い冊子が配られている。「新しい障害児教育の理論と実践―差別を克服し教育権をかちとるために」という文字が踊っていた。冊子は、組合の分会長だったその若い先生が全障研の結成大会に参加してもらってきたものでした。私は42歳。和歌山のろう学校で在職12年目でした。

*
日教組教研の特殊教育部会のレポートを読んだときに、発達保障の根っこは和歌山にもあったのだと思えましたね。

1955年、ろう学校の隣接校の体育教師によるろう学校生徒の殴打事件がありました。専攻科の二人の生徒が、隣接する商業高校でのバスケットの試合を見に行つたときのことです。会場の注意の放送や表示が聞こえなかった、見えなかった二人は、試合が終わったコートを下駄ばきのまま悠々と歩いていたら、高次の教師に捕えられ、殴られて一週間の傷を負わされました。校長がそのことを問題にし、全校討議がなされ、教育委員会や教組、PTAが提起、全国紙にも掲載されました。その結果、門も扉もないろう学校の差別の事実が次々と出されました。このことは、もう学校の生徒や寮生の生活要求となっていきました。

そして、「愛される障害者」というような人間像の追求は間違っていること、教育せずに放つておいて、それでだめな人だとするのはおかしいこと、特殊教育ではなく、人格の完成をめがけず普通教育の一環である教育目標のことも語られました。「差別から解放」は動評や安保闘争を確かなものにし、日教組特殊教育部へ提起されたのです。

実は私の5番目の弟は、1歳過ぎに麻疹のために内耳炎となり手

術をして一命をとりとめたが失聴していました。生家の隣には村人に「唾」と呼ばれる女の人がいて、幼い時からその姿を見て育つた私は、自分の弟の将来が不安だったんです。女子師範に入ったのも弟のために何かを見つけたかったからです。

全障研は家族です!

太平洋戦争のはじまる1941年の4月に師範学校に入り、1943年に卒業して、龍神という山の中の小学校に行きました。それから敗戦の年に、印南いなんという浜辺の小学校に変わって。そこで、戦争が終わったわけ。山の中では配給だけの生活だったの。だから栄養失調もあったし、過労もありました。それで結核になってね。10年ほど休養してたんです。入院中に、新薬ストマイで失聴していく人、戦争未亡人、長欠児などさまざまな人生に出会い、聖書を学び洗礼を受けました。

私がろう学校の教師になったのは1954年。

ろう学校の教師になるために、退院してから一年間、東京教育大学の教員養成所のろう教育課程に進学しました。それが1953年。その時に出会った川本宇之助先生からは「これを知る者は、これを

好む者に如かず、これを好む者はこれを樂しむ者に如かず」という言葉を学びました。

それで、田中昌人さんに、「民主文学もやりたいけど、全障研もやりたい、どっちもやろうか」と相談したら、「どっちもやりなさい」とって。それからずっと両方に関わっています。

全障研に出会って、発達は権利だということがよくわかりました。糸賀一雄先生が書いたものを読んだらね、知的に遅れた子が、1歳半の発達を獲得するための努

力と、大学に入るような人たちが一つ段階が上がるのと、人間として同じ値打ちだとして書いてあります。だから発達することは権利だとして。上の発達が尊くて、下の発

達が悪いっていうのではなくて、同じ値打ちなんです。それを讀んだとき、「あ、これが差別と闘うことなんやな」とって思いました。和歌山の言っていた差別観の上に、近江学園実践がもってきてくれた発達観っていうのと一緒になってね、全障研ってええなと思



清水寛さんと



龍神小学校にて

*

以前、「あなたにとって全障研ってなんですか？」って聞かれたことがあります。清水寛さんは「学校です」と言われましたが、私は「家族です」とって答えました。全障研は安心できるのね。誰とでもすぐに親しくなれる。何を言っても構わないっていうのかな。発達は権利やって言ってくれるのが一番うれしい。いつでも発達する、その人自身がその人自身になっていく過程だということ。それは誰でも同じやということね。

全障研には尊敬できる人がいっぱいいてね。それも、障害者に尊敬できる人があるっていうことね。全国大会では、地域における自立の分科会ができてからはそこにはっきり出ている。新潟の佐藤陽くんは、「みんなのねがい」のひろばの欄に、7月号でもうレポート出しましたって書いてありましたね。佐藤くん、和歌山の大会（1992年第26回大会）の時はじめて分科会に来たの。あの時は車いすの前の板に頭を乗せたまま、発音する機械で、「あ・き・ら・で・す」とって言っていました。あの時分、施設には自立がないって言って、生活保護をもらってでも施設を飛び出すっていうこ

とが流行りだした時でした。佐藤くんは、「僕は卒業したら、母親の腰が悪くなってきていてるので、施設へ入らないと仕方がない。作業所も遠いから通えない。やっぱり施設へ入ります。でも施設にも自立があるっていうことを実践する」とって言って以来、ずっとその施設での自立のレポートを出しているんです。たいしたもんだと思います。

—今やりたいことは何ですか？

これからもっと飛躍したいと思っています。今までの実践をまとめた本を書けば飛躍するんじゃないかな。人間を書くときには、ただの報告ではなくて、小説を書く方が一般性があると思います。小説にできるっていうことは、本当にその人を内面化していないと小説にできないんだと思います。今そんなことを考えています。

人間が好き、この世が好き、人間の集まっている社会が好き。だからいい社会になってほしいと思う。北欧ツアーに私も4度参加させてもらってたくさんことを学びました。考え方を変えたらああいう社会ができるのだから。幸せな社会になってほしい。みんな幸せに暮らしてほしい。そのことにかかわっているから楽しいです。